

転移先は薬師が
少ない世界でした⑧

饗餐
Toutetsu

Regina
BUNKO

レン

ソラ

ロキ

神獣である星天狼と
フェニルの親子。

ソル・レオン
太陽の獅子と
ルナ・レオン
月の獅子の家族。

ユキ

シマ

ロック

リン^{すずはら ゆい}(鈴原優衣)

神様のうっかりミスで異世界に
転移した元OL。
チートなスキルを活かし、
薬師としてポーション屋を
営んでいる。

エアハルト

『フライハイト』のリーダー。
リンのよき理解者で、夫。

スマレ

神獣であるクイーン・
スモール・デスタイルト。

ラズ

神獣である
クラオトスライム。

アレク

『フライハイト』のメンバーで、
ナディヤの夫。
エアハルトの元執事。

ナディヤ・
テールマン

『フライハイト』のメンバーで、
アレクの妻。
リンのよきお姉さんの存在。

登場人物紹介

目次

転移先は薬師が少ない世界でした 8

番外編

リンの薬師講座

番外編

異世界の○○

番外編

エアハルトたち主従の出会い

番外編

レーベルサイトSS集

書き下ろし番外編

今度こそ仕合わせに（守護霊視点）

7

147

167

193

207

269

転移先は薬師が少ない世界でした
8

プロローグ

リンこと私——鈴原優衣^{すずはら ゆい}は、かつて日本で経理の仕事をしていた。八年くらい働いていたけれど、ある日会社^がが倒産してしまってハローワークへ通うことに。

そしてその帰り道、アントス様という神様のうっかりミスで、異世界——ゼーバルシュに落ちてしまったのだ。

ゼーバルシュは魔神族^{ましんぞく}をはじめとして、ドラゴン族や獣人族、ドワーフやエルフ、人種など多種多様な種族がいる世界で、日本とはまったく異なる文化を形成している。

そんな異世界に突然放り込まれて、元の世界にはもう戻れないということを聞いた私は、あまりに衝撃的な出来事に驚き、不安でいっぱいになった。

孤児で、元の世界にも家族がいらないとはいえ、誰も知り合いがないこの世界でやっていけるのだろうか……

そんなことを考えている私を慰め、支えてくれたのは、日本を担当している神様であるツクヨミ様だった。異世界に落ちる原因となったアントス様も一発殴らせてくれて……

神様たちのサポートの元、お詫びに授かったチートな調薬スキルを活かし、私は『薬師・リン』としてポーション屋を営み、新たな生活を始めることになったのだった。

異世界に来てからは、私が想像していなかったような出来事がたくさんあった。

まずは、従魔^{じゅうま}たちの存在だ。

クラオトスライムのラズに、クイーン・スモール・デスタイルアントのスマレ。親子である星天狼^{シリウス}のロキとフェンリルのロック。同じく太陽^{ソル・レオン}の獅子のレンとユキ、月の獅子^{ルナ・レオン}のシマとソラという四匹の家族、従魔たちの眷属^{けんぞく}となった元ココッコたち。

みんなとても可愛くて頼もしい私の家族だ。

強くて優しく、私にはもったいないような従魔たちと出会えたことは、本当に幸々な出来事だった。

他にも、忘れられない出会いがたくさんある。

私が入っている『フライハイト』のメンバーに、ドラゴン族のヨシキさんがリーダー

を務める『アーミーズ』のみなさん。

『フライハイト』のみなさんは、私の異世界での初めての仲間で、心から信頼できる人たち。

『アーミーズ』のみなさんは転生者で、日本にいたとき私の側にいた関係者や知り合いという、世間は狭かった！ 的な人たちばかりだ。

なによりも、『フライハイト』のリーダーであるエアハルトさんは、異世界に来たばかりの私を助けてくれた恩人であり、大事な婚約者！

日本にいたときにはまったく考えられなかったことが起きて、嬉しいやら恥ずかしいやら……

そんな中、ガウティール侯爵家の領地に行って、ガウティール侯爵ご夫妻とダンジョンに潜ったりもしたし、王宮医師のマルクさんと前世は私がお世話になった施設の院長先生であるハインツさんと森に散策に出かけたりもした。

森で柚子^{ゆず}とレモンの中間のような味がする果物——ユーレモの有効活用法を発見して、マルクさんに丸投げしたこともあったなあ。

それから、友人たちがどんどん結婚していく中で、とうとう私もエアハルトさんと結婚——この世界の言い方だと婚姻をしました！

準備には大変なこともあったけど、みんなが協力してくれて思い出深い一日になった。

なんと、ウェディングドレスの布や髪飾りなどは、私に内緒で従魔たちと眷属たちが集めてくれたのだ！ それを聞いたときはとても嬉しかった。

私に内緒だなんて、可愛いでしょう？

それに、一応招待状を出したものの、とても忙しい方たちだから来てくれないだろうなあと思っていた、私の後ろ盾でもある宰相様と王様が、お忍びで来てくださって啞然とした。

それに加えて式が終わるタイミングでアントス様の像が光り、そこから祝福の言葉をもらったりもしたよ。

予想外なことばかりだけど、とっても嬉しかった。

本当にいろんなことがあったけど、なんだかんだと異世界に来てから約三年が経ち、みんなとの素敵な出会いのおかげで楽しく充実した日々を送っている。

もちろんそれは、結婚したことも含むのだ。

日本にいたころは、施設にいた当時のあれこれがあって、結婚できるだなんて考えてもいなかったし、諦めてもいた。

このまま枯れた女か喪女^{もじょ}となり、一生独身として過ごすんだろうなあ……と、漠然とした思いを抱えてた。

だけど、アントス様のせいでこの世界に落ちて、ツクヨミ様をはじめとした日本の八百万の神々の応援（？）もあって、幸せな生活を送ることができた。

その縁^{えんじ}を繋いでくれたのは顔も知らない亡き両親であり、ご先祖様でもある私の守護霊のおかげだ。

いつか、守護をしてくれている人にも会いたいな。

そんなことを考えていたわけだけど、結果的に幸せになりました！ といろんな人に報告できるのがとにかく嬉しい。

第一章 出発準備

エアハルトさんと結婚し、嬉し恥ずかしめくるめく初夜^{しよや}を明かした、二日目の朝。

「おはよう……優衣」

「お、おはようございます、エアハルトさん」

エアハルトさんの腕の中で目覚め、朝っぱらから耳元で囁かれました！
破壊力抜群な美声です！

照れて私の顔が火照^{ほて}っているとわかっていながら、朝から唇にキスしてくるとか……！！

ニヤリと笑っているんだから、エアハルトさんは確信犯だと思う。

くそう……イケメンでイケボめ！

とはいっても、嬉しくないわけはなく。

朝から散々キスをして、ギシギシいう体に鞭を打ちながら、いそいそとベッドから起き出して着替える。



あー、エアハルトさんにごったから足腰が痛い！
あんなに体力バカだとは思わなかった！

湯舟に使うて体をほぐしたいー！

なんて思いつつ、すぐに食堂に向かった。

昨日から拠点でご飯を食べているからね。

もちろんアレクさんとナデイさんご夫婦と一緒に。

四人でわいわい言いながらご飯を作り、みんなで食べる。全員の従魔たちと、私には眷属たちもいるから、作るのが大変だ。

だけど、誰も料理人を雇おうとは言わない。

エアハルトさんが騎士^{きし}だったときは、身分上は貴族だったから料理人を雇うのは当然だったけど、今は全員が平民となり、冒険者として暮らしている。平民の……冒険者としての暮らしは、料理人だけでなく使用人を雇う必要がない。

貴族は、人を雇うことも仕事に含まれるものだからね。

これはエアハルトさんが言っていたんだけど、平民の私たちが料理人を雇うのは違うからと、ララさんとルルさん、ハンスさんが自分の店を出店して拠点を置いていったタイミングで、もう料理人を雇わないと決めていたんだって。

それに、元は貴族だったエアハルトさんたちも、徐々に料理を覚えて自分たちで様々なことができるようになったから、専門の人々の助けは必要がないのだ。

エアハルトさんたちは、料理人を雇わないと決断した理由は、自分たちで作れることが一番大きいとも言っていたなあ。

まだまだレバトリリーは少ないけど、私や母、『アーミーズ』のみんなに教わったりして、作れる料理を増やしている。

失敗することもあるけれど、今はそれすらも楽しいんだと、エアハルトさんもアレクさんもナデイさんも、そう言って笑うのだ。

楽しく料理するのはいいことだねと、両親と一緒に微笑んだのは内緒。

ポーシオン屋を営んでいる私と違ってエアハルトさんたちはダンジョンに潜る機会が多いから、拠点に私と私の従魔たちと眷属たちしかいなくなるときもある。

そんなときは、私一人で今まで通り料理をすれば問題ないし、場合によっては今まで通り、店の二階に住めばいいだけの話だしね。

それはともかく。

私たち四人はご飯を食べながら、新婚旅行について話し合っているのだ。

この世界では、新婚夫婦には蜜月期間みつげつきかんというものが与えられる。

蜜月期間みつげつきかんは二ヶ月ほどで、その間は仕事を休むことも認められているのだ。

普段は、通りのスケジュールやルールに従って店を運営しているから、私のように一人で店を営んでいる人たちは、長期のお休みをもらうことが難しい。

だからこそ、多くの人たちはこの期間に新婚旅行として遠い場所に旅行に行くことが多いんだって！

貯金に余裕がない人はがつり休まないことが多いらしいんだけど、私たちの場合はまったく問題ないので、ゆっくり休ませていただきます！

ということで私たちも、新婚旅行を兼ねてどこに旅行に行くか結婚前からずっと話し合っていた。

ちなみに、話し合いにアレクさんとナデイさんが加わっているのは、私たちが結婚するのを待って、二人が蜜月期間みつげつきかんをずらしていたからだ。

アレクさんとナデイさんは私たちよりも先に結婚していたから、もちろん先に蜜月期間みつげつきかんに入って二人で旅行に行くこともできたんだけど……

できれば四人で、そして従魔たちと一緒に、『フライハイト』としても旅をしたかったんだって。

エアハルトさんに忠誠を誓っているアレクさんらしいなあ。今はあれこれ言える親友

になったみたいだし。

それに、私とは滅多に行動できないこともあって、ナデイさんが「リンとも一緒に行きたいですわ!」と言ってくれたそうで……

それなら二組の夫婦で蜜月期間に新婚旅行に行こうということになったわけ。

そして肝心の目的地だけど、これがなかなか決まらない。

「リンの世界の蜜月期間は、どういうことをしていましたの?」

ナデイさんがキラキラした瞳を向けて尋ねてきた。

「私の世界というか、私がいた国だと、蜜月期間は長くても十日くらいです。一般的だと、三日くらいですかね?」

「短い!」

「こちらだとそう感じるかもですね」

三人とも、私の想像以上に驚いた表情をしている。

二ヶ月もあつたら、そりゃあ短く感じるよね。

とはいえ、地球でも国によって期間は様々だったから、文化の違いがあるのだろうと伝える。

そのうえで、新婚旅行はどこに行ったかといえば。

「仕事の関係で長期間は休めない人たちが多かったので、自国内にある観光地に行く人多かったと思います」

「まあ、観光地、ですの?」

「はい。温泉だったり、山岳地帯だったり……あとは、他の県——領地に行って特産物を食べたりですね。しかも、私のいた国の観光地にはある程度の観光名所があったり、動物園や水族館などの施設があったりしたんです。他にも現地の特産品の買い物をして、家族や友達へのお土産にしたりと、いろいろと楽しめる要素がありましたし」

「ほう——」

感心しきりな三人。

エアハルトさんに動物園と水族館とはなにかと聞かれたので、きちんと説明した。

動物園と水族館の中には遊園地と一緒にいるところもあったことを伝えたら、ますます興味を持ったみたい。

もちろん、遊園地の説明もしました!

遊園地についてどうやって説明したらわかってもらえるか、苦労したけどね。移動手段についても聞かれたから、車、電車、飛行機と船の説明もした。

「リンのいた国には、様々な移動手段があるんだな」

エアハルトさんが感心した様子で呟く。
「そうですね。蜜月期間みつづきかんが長い人たちの中には、ハワイ——海が綺麗な他国に向かう人たちも多かったので、飛行機は必須の交通手段でした」

日本は島国だから、他国に行くには飛行機が必須だったからね。他にも豪華客船という世界中を回っている船の話もしたよ。

お土産は、その地の特産物やその土地らしいものを買ったりもすると話す。

「私のいた国の新婚旅行の目的地として、一番イメージに近いのは、フルドの町ですかね？ 温泉地の雰囲気は、あんな感じでした」

「なるほど」

フルドの例を出すと三人とも納得した。

そういつた話をしていると、アレクさんがアイデクセは内陸に位置しているので、海に面していないという話をしてきた。確かに、私もこの世界に来てから海を見ていない。それを踏まえて、ナデイさんとエアハルトさんからも地上の海産物が食べたいという意見と、本物の海が見たいとの意見が出た。

せっかくなので、新婚旅行で海のある国——ドラールに行くことに。

目的地の候補となる国は何か国があったのだけど、西か東、南に行くかによって移動

日数が変わる。

いくら長い蜜月期間みつづきかんとはいえ、移動時間などを考えると現地でゆつくりする時間は、

そう長くはとれない。

海がある他国と比べた結果、ドラールが一番近いことがわかったので、ドラールへ行くことを決めたのだ。

エアハルトさんと私は、二人でドラールに行ってみたいねと話していたことがあったので、とても嬉しかった。

もちろん、季節的にも観光がたくさんできそうな国や、結婚前に周りの人たちにどの国がいいかとオススメを聞いて回った結果教えてもらった国などを含め、地図を眺めてあれこれ意見を出し合った。

最終的に、距離が一番近いドラールと観光地が多いもうひとつの国で迷ったのだけど……

でも結局、『アーミーズ』の本当の拠点であり、転生者が多数いるという噂のドラールに行きたいと、我儘わがままを言わせてもらったのだ。

だって、『アーミーズ』の拠点ではダンジョン産ではなく、自家製の味噌みそと醤油しょうゆ、豆腐を作っていると聞いたから、どうしてもこの目で見てみたかったのだ。

しかも、ドラール全土に広まっているんだって。それに、マドカさんの領地には海苔^{のり}があると聞いたしね。

念願の海苔^{のり}！是非とも大量に欲しいところ。

そんなわけで、ドラール行きが決定し、四人で旅の方法をどうするかや、いつ出発するかという話について話し合っているんだけど……

「無事目的地が決まったことだし、できる限り早く出発したいと思うんだが……ドラールまでのルートはどうする？」

エアハルトさんがみんなに意見を聞く。

「馬車ですと、時間がかかってしまいますしね」

「そうですね。それに、長時間、馬車に乗るのは……」

「だよな。やっぱ、空の旅しかないのか……」

エアハルトさんにアレクさん、ナデイさんは渋い表情をしている。

それにしても、空の旅ってどういうことだろう……？

『フライハイト』で相談していてもなかなか決まらなかったもので、それならばドラールからアイデクセまで来たヨシキさんたち『アーミーズ』に意見を聞こうということになり、早速どうやって往復したのかを含め、アイデクセからドラールまでの道のりを聞

いた。

ヨシキさんたちはアイデクセまでは基本的に馬車で来たそう。

だけど、途中で空の旅で移動距離を稼いだから、一ヶ月かららずに到着したらしい。

まだ赤ちゃんだったリョウくんがいたのに、凄いいね。

アイデクセからドラールまで、空だと一直線に行けるから七日から十日程度、馬車で急ぎだと一ヶ月から一ヶ月半、ゆっくりで一ヶ月半から二ヶ月かかるという。

馬車だと山や森を迂回^{うか}して三つの国を跨ぎ、ぐるーっと回ることになるから、どうしても時間がかかるそう。

まあ、空だと一直線とはいえ、当然のことながら国境を勝手に跨ぐわけにはいかない。なので、空の旅といえど国境の近くになったら地面に降り、きちんと出入国の検問を受けてからまた空の旅へと戻る形になるんだって。

しっかり考えられているんだね！

普通に旅をするんじゃないっていわば新婚旅行だから、そんなに時間はかけていられないし、蜜月^{みつづき}も二ヶ月しかない。

できればドラールでは一週間以上ゆっくりしたいということで、空から行くことになった。

ずっと気になっていた空の旅だけど……なんと従魔たちに力を借りるということらしい！

全員、大型な鳥類の従魔がいるからね。

飛行機みたいな乗り物があるのかと思っていたから驚きました！

出発は明日の早朝の予定。

それまでに旅の準備をしないといけないんだけど、ぶっちゃけるとダンジョンに潜る準備とあまり変わらない。せいぜい、数着の着替えを持っていくくらいしかないのだ。

水は魔法で賄えるし、食料は途中の町で買ったり、魔物を狩ればいい。

着替えだつていざとなったら途中の町で買うことができる。【無限収納】にしまつて

しまえば旅行鞆もいらないし、歩くときの鞆さえあればいいから、ほぼ手ぶら。

その鞆だつて、【無限収納】になっているマジックバッグだしね。

そう考えると……ねえ？

行動力のあるエアハルトさんたちからすれば、無問題なわけ。

「ふむ……よくよく考えると、今から出発できるな……」

「そうですね。出発いたしますか？」

「わたくしはそれでもいいですわ」

「私のです」

「なら、さつさと準備して出発しよう」

「「わかりました」」

「あ、私はママに声をかけますね」

というわけで、明日の出発が急遽今日になりました！

大慌てで母のところに行き、店番を頼む。母は急ねえ、なんて苦笑している。

「リン、神酒とハイパー系、万能薬の在庫を見てちょうだい」

「わかりました」

母は神酒以外のポジションを作れるからね。ハイパー系はまだ失敗することが多いみたいだけど、それでも作れているんだから凄い。

もちろん、私と母の作ったポジションではレベル差があるから、確実にレベル五が作れるハイ系以外は店には出していない。

店内に貼ってある鑑定書には販売しているポジションのレベルが記載されているし、認定証が許可証に書かれているレベル以外のものは販売できない。

無許可のポジションを販売すると詐欺として告発され、営業停止や廃業に追い込まれてしまうからだ。

それをわかっているから、母もレベル五以外のものは店には出さないし、出せないものは『アーミーズ』が使用している。

ちなみに、薬師が廃業に場合合は、そういうことをやらかすか、犯罪に走った人ばかりらしいしね。あとは、老齡ろうれいによる引退かな。

それはともかく、ハイ系は母もレベル五が安定して作れるようになったから、店に出しても問題ない。

母に言われたポジション類全部の在庫を確認し、この日のためにちまちまと作り貯めていた神酒ソーマを千本と、万能薬とハイパー系を五千本ずつ、ライゾウさんが作ってくれた【無限収納インベントリ】になっているマジックバッグの中に入れる。

もちろん、別々に収納しているのだ。

「ママ、ハイ系以外は在庫を出しておいたよ」

「ありがとう。いくつあるの？」

そう聞かれたから出した数を言くと、「多すぎ！」って呆れられてしまった。

「そうは言うけど、もし不測の事態があつたらどうするんですか？」

「それは……」

「念のためなので、持っていてください。もし神酒ソーマが足りないようなら、ここにもあと

千本ありますから」

「リン……」

カウンターの下に【無限収納インベントリ】になっているマジックバッグがあるんだけど、そこにも神酒ソーマが千本あると教えたら、愕然とした顔をしていた。

他にも、万能薬とハイパー系がまだ五千本ずつあるって言ったら、どんな顔をするんだろう……？

それは父に言うことにして、もし足りないって相談されたら出してと伝えておこう。店のことを母にお願いし、その足で向かいにある父の診療所に行く。

カウンターの下にあるポジションの話をすると、苦笑しながら「わかった」と頷いてくれた。

これから出発することを伝えると「急だな」と言われたけど、それ以上にも言われることはなかった。

「気をつけて行っておいで。職人支部のみんなにも、よろしく伝えてくれ」

「はい。いつてきます！ リョウくんも、お土産を期待しててね！」

「あーい！ リン姉、いてらーちゃん」

「いつてきます！」

リヨウくん^{もみじ}の紅葉の手を握ってからお土産の約束をし、バイバイしてから診療所を出る。

私がない間は、両親が店の二階に住んでくれるそうだと。

店があるのに中に誰もいないと、泥棒^{どろぼう}に入られることがあるからなんだって。

しかも、店主である私がないというのは一番まずいことだという。どれだけ優秀な防犯機能があっても、泥棒^{どろぼう}が入りやすい家だと目をつけて、精力的に狙ってくるからだそうだと。

普段は私や従魔たちがいるから、夜に外出していたり、ダンジョンに潜ったりしていても問題なかったけど、さすがに二ヶ月も留守にするのはよろしくないらしい。

だからこそ、両親とリヨウくんが期間限定で住んでくれることになった。

父の診療所にはお弟子^{でし}さんが寝泊まりしているから安心していられるけど、私は弟子^{でし}をとっていいからね。

だから、まったくの無人になってしまうことを考えるとよろしくない、ってことみたい。

弟子^{でし}がいないとこういう弊害^{へいがい}もあるんだね。

帰ってきたらになるけど、誰か弟子^{でし}をとったほうがいいのかなあ……

それはゆくゆく考えるとして、しばらくはいいか。

従魔たちに相談して、私が拠点に住むようになったら従魔たちに巡回してもらおうのでもいいかもしれないし。

もしくは週に一回、エアハルトさんと一緒に店のほうに泊まってもいいしね。

それはともかく。

両親には神様たちにいただいた緑茶類も自由に飲んでいいと言ってあるから、私がない間は大丈夫だろう。もしお茶がなくなったら、茶筒ごと神棚にお供えしてと言っているし。

当然のことながら、神棚のお供えもお願ひしてあるので問題ない。

バタバタしつつ診療所を出たあとは、ゴールドさんや隣の道具屋さんにも新婚旅行でしばらく店にいないからと話し、慌てて拠点に戻る。

「すみません、遅くなりました！」

「大丈夫だ。俺たちも今準備が終わって、挨拶してきたところだから」

「よかった！ 鞆を取ってきますね」

「慌てて転ぶなよ？」

「ぶー！ 転びません！」

フラグを立てるようなことを言わないでよ、エアハルトさん！
まあ、転ぶこともなく、ロキがリュックを銜えて持ってきてくれたから、助かった！
外に出ると、エアハルトさんが建物を一周して戻ってくる。

玄関の鍵を開めてからなにか呟くと、一瞬半透明の壁のようなものが出たあとで建物が光り、消えた。

今光ったのは、長期間家を空けるときに使う、防犯結果なんだって。魔法ではなく、複数の魔道具を使用して、結界を作っているとのこと。

解除できるのは家主であるエアハルトさんとアレクさんのみで、泥棒どろぼうが入ろうと扉に手をかけると、ビリッと痺れて通りに弾き出されると同時に、騎士きしの詰め所に連絡がいくようになっていくという。

店が使っているような防犯機能と同じものらしい。

ファンタジーだなあ……

カギ閉めなどが終わると従魔たちを引き連れて門まで行き、挨拶をして出た。

しばらく歩いてから誰もいないことを確認し、三人はそれぞれの飛べる従魔たちに乗り、他の従魔たちは小さくなって彼らの前にある籠かごの中に入る。

というかね……いつの間に小さくなれるスキルを手に入れたんだろう？



神獣じゃなくても取得できるって知らなかったよ……
たぶん、ロキたちが教えたんだろうけどさ。

そして私だけど、グリフォンのリュイ、ガルーダのカーラ、シームルグのラン、ズーのベルデとアビー、フレスベルグのペイルの六羽が、休憩のたびに交代で飛ぶことに。コカトリスのロシユは飛ぼうと思えば飛べるけどそちに特化しているわけじゃないし、サンダーバードのルアンとクインだと私を乗せて飛ぶには小さすぎるという理由で、この六羽になったのだ。

飛ぶ順番でかなり揉めていたんだけど、決着してよかったよ。

決着方法？ あみだくじにしましたが、なにか。

もちろん、他の従魔たちは小さくなって籠かごに入っているし、ロシユも籠かご、それ以外の他の飛べる子たちは私たちの護衛を兼ねて、空を飛んでいくのだ。

その護衛として飛んでいくルアンとクインの頭の上には、なぜかラズとスマレが陣取っている。

「準備はいいか？ ……よし。出発」

上空は寒いからともこもこのコートを着こみ、エアハルトさんの合図で全羽が空を飛び立つ。

途中にある町にも宿泊するって言っていたし、観光もするつもり。
そんな町やドラーレルはどんなところなのかな？ 楽しみ！

第二章 空の旅と国境の町・ガスト

拠点を出て、南西に向かって飛ぶ私たち。

今は国境を目指している。

本来なら国境に到着するまで、馬車だと三日かかるそうだと。というのも、道中に複数の森があって、馬車だと整備された街道を通るために迂回しないといけないから。

でも今は、森を迂回しないで真っ直ぐその上空を飛んでいるからか、もうじき着きそうだとエアハルトさんが教えてくれる。

飛び始めてまだ一時間弱だから、想像以上に速いスピードで飛んでいるみたい。

とはいえ、風圧で飛ばされないよう結界を張っているらしく、移動はかなり快適だ。

上空にいるから寒いけど、もかもコートがいい仕事をしていて暖かい。

上空から地上を見下ろしてみる。

森と草原の間にあるのは、土がむき出しの街道だ。

小さな点の塊が動いているから、誰かが馬車で移動しているんだろう。行列のように

なっているから、大きな商会の隊商かもしれない。

森自体はあちこちに点在していて、その合間に川も見える。

それに、沼や湖があるのか、ところどころ地面が輝いていた。太陽の光を浴びて、水面に反射しているんだろう。

ゆるく、あるいは大きく蛇行している川は、上から見るとヘビのよう。

それを見て、四国に龍の形をした川がある！ とSNSに投稿されていた写真を思い出した。

曲がりくねった龍の尾と胴体、手足の部分が吉野川、頭部を早明浦湖だと説明されていたわけ。

眼下に見える川は、それに近い形だ。

頭にあたる部分はないけどね。

うしろを振り返れば冠雪した高い山脈が見え、そのままぐるっと見回せば、頂上だけ冠雪している山に、緑一色の山。

山脈のあたりに黒い塊が空を移動しているのが見えた。たぶん空を飛ぶ魔物がいるんだろうと推測することができる。

——本当に、この世界は綺麗だ。

まるで、空撮をした動画をテレビで見ているみたい。
そんな感動を覚えつつ、移動を続ける。

見上げればどこまでも続く青い空がグラデーションを作り、それを彩るように雲が浮かぶ。白い雲もあれば、遠くには薄いグレーの雲も見える。

グレーっぽい雲の下は雨かなあ……なんて考えている間も、着々と目的に近づいていて……

眼下に映る景色は、森を飛び越え、川や草原を通り越して、また森に入ってしまった。自然が豊かな世界だと改めて感じると共に、魔物もいる世界なんだなあ……って実感する。

もうすっかり慣れてしまったけど、この世界には様々な種族が住んでいるんだもんね。まだまだ、私が見たことのない景色がたくさんあって、会ったことのない種族の人々がたくさんいるんだろう。

そんなことを考えていたら、魔物が襲いかかってきた。

きっと空を飛ぶ魔物もいるだろうな……と推測はしていたけど、本当にいるんだね。地上同様に野生のワイバーンやサンダーバード、レッサードラゴンが襲ってきたよ……

まあ、護衛をしているみんなが【風魔法】や【雷魔法】で呆気なく倒している。

スパッと切れたりピカッと光って稲妻が走ったあと、どんどん魔物が落下していく。私たちは落下した魔物を掴んで、スミレの糸で捕獲してマジックバッグの中にしまっていた。

それらは休憩のときに解体。もしくは、ギルドに依頼があったら依頼票を剥がしてそのまま持ち込み、達成扱いにしてもらうんだって。

旅の道中とはいっても、効率的に動かないとね！

戦闘を繰り返しているうちに、遠くのほうに白い建造物が見えてきた。

万里の長城ほどではないけど、同じくらいに長い壁と、それよりも先にある建物群だ。

「お、見えてきた。手前にあるのがアイデクセ国の隣国となるベイエレン国との国境、その先が国境の町、ガストだ」

エアハルトさんが教えてくれる。

「ガスト……」

国境のかなり先に、大きな石垣の円形があった。

そこから四方に街道が見えることから、重要な場所でもあるんだろう。

確か、交易が盛んな町だと言っていた気がする。

ただ、名前を聞いて某ファミレスを思い出してしまつて、吹き出してしまったのはしょうがない。エアハルトさんたち三人に不思議そうな顔をされたから、前の世界にあつた食堂と同じ名前だと言うと、同じように吹き出していたつけ。

だよね、そんな偶然があつたら吹き出すよね。

『フライハイト』のメンバーは、私が渡り人だ^{わた}と知っているからね。

最近では、四人や『アーミーズ』のメンバーがいる場合に限り、日本のことも話すようになった。

もちろん、周囲に誰もいないことが前提だけど。

飛んだまま国境を越えるわけにはいけないので、国境を越える手前で地上に降りる。移動中、籠^{かご}に入ってもらつていた従魔たちにはそのまま籠^{かご}に入ってもらつていた。

私たちが乗つてきた従魔たちを引きつつ、従魔たちがいる人専用の門に行くと、すぐに順番がくる。

「ほう？ 飛べる従魔とは珍しいな」

門番が笑顔で声をかけてきた。

「だろう？ おかげで旅が快適だよ」

「それは羨ましい。よし、いいぞ。次」

タグを見せてから白水晶に触るエアハルトさん。次にアレクさん、ナディさんと続き、最後に私の番になった。

門番は私のタグを見てギョツとしたあと、さらに従魔たちが上から見ていたことにもギョツとする。そしてなにかを思い出したのか、目を輝かせる。

「は……ははは……。もしかして……ローレンス様の怪我を治した薬師って君か？」

「はい」

なにかと思ったら、 그레이さんのことか！

「おお、ありがとう！ 俺が礼を言うのは違うかもしれないが、やっぱり尊敬している殿下の怪我は心配だったからな。まあ、今は王子じゃないが」

「そうですね」

「まあ、なんだ。とにかくありがとう。よき旅を。そしてアントス様のご加護がありますように」

「ありがとうございます」

にっこり笑つてタグを返してくれる門番のお兄さん。

……もう加護があります、とは、さすがに言えなかった。

それにしても 그레이さん、本当にいろんな人に慕われているんだね。

さすがだなくと嬉しくなるよ。

無事に国境を越えたということで、従魔たちには役割を交代してもらおう。

飛ぶ子が交代するので、私は籠かごをリユイからベルデに変え、そのまま跨る。

「よろしくね、ベルデ」

《任せて、ご主人様！》

ベルデは気合充分といった様子だ。

「お待たせしました」

「よし。あと少しで国境の町・ガストだから、その手前まで飛んでいく」

エアハルトさんの合図で飛び立ち、そのままガストの近くまで飛ぶ。

まあ、国境からガストまで凄く近い距離だったから、すぐに降りただけだね。なので、次に飛ぶときもベルデの担当のままだ。

門で白水晶に触り、中へと入る。

ここでも門番にギョツとされたけど、それは他のみんなの従魔たちも同じだった。

まあ、私のほうがヤバイ従魔たちと眷属たちだけど、三人の従魔たちもヤバイのがいるものね。

神獣やそれに次ぐ実力の魔物のオンパレードなんだから、なにも知らない人にギョツ

とされるのは当たり前か。

ガストには食料調達に寄っただけなので、それほど長く滞在することはないから、すぐに出発することになる。

ガストはとても賑やかな町だけど、特別な観光地があるわけじゃないから、ドラールで過ごす時間のために早めに出るのだ。

町に無事に入ったところで、早速みんなで大きな通りを歩いていく。

まだ七時前だからなのか、朝市がとても賑わっている。

もちろん、従魔たちは通行の邪魔にならないようみんな小さくなっているんだけど……

私はさすがに全員を肩や腕にとまらせることはできないから、レンとシマだけが大きくなり、他の従魔たちは彼らの上にいた。

鳥の子たちは私とレンとシマに分散し、ロキとソラがレンの上、ロックとユキがシマの上だ。ラズとスミレは私の両肩にいる。

レンとシマは護衛も兼ねているので、私の両隣を歩いている。

初めての他国、しかも交易の拠点ともいえるべき場所。

だからなのか、アイデクセの王都で見たことがある種族の人もいれば、初めて見る種

族や服装の人もいる。

王都ではあまり見なかった、背中に翼が生えている人たちもたくさんいて、その翼の色も様々だ。白と黒、茶色に灰色の人もしれば、全体的には茶色や黒だけど、先端が真っ白の人もいた。

どこの国の人なのかな。

興味はあるがあまりにもジロジロ見るのは失礼だと思い、それ以降は見ることをやめた。

他にも、キツネの耳と尻尾しっぽがある商人の恰好をした人や、額に小さな角が生えていて、体の大きな冒険者もいたよ。

あとでこっそりとエアハルトさんに聞いたら、鬼神族という、西大陸にいる魔神族じゃないかと言っていた。

なるほど、一口に魔神族といっても、大陸によって違うってことなんだろう。

そういった人たちもいたし、初めての他国ということで珍しさから私も従魔たちも、きよろきよろと周囲を見回すので忙しい。

三人は落ち着いているから、来たことがあるのかな。そう思って聞いてみたら、一度だけだけ家族と来たことがあるんだって。

なんでもガストの町から北に向かうと湖があつて、そこが避暑地ひしよちになっているという。王都の近くにある湖とは違うもので、魔物もランクの低いものしかないそうだし、それもあり、アイデクセの貴族たちに人気の避暑地ひしよちらしい。

まあ、なにもないから一回行けばいいと思ったのか、あるいは仕事が忙しかったのかわからないけど、一回訪れたきり三人は再訪してこないみたいだけど。

そんな話をしているうちに、多くの朝市が立つ商店街に着く。

パツと見ただけでも、いろんな種類の野菜や肉、魚を見つけることができた。

さすがに果物は少ないけど、ダンジョン産と書かれた看板のところには、バナナとみかん、リンゴの絵が描かれていて、私がもたらした情報がここまで浸透しているんだなあと嬉しくなった。

「さて、食材を探すか」

「そうですね。肉は途中で狩れますから、野菜や果物でしょうか」

「湖で獲れる魚と、調味料も欲しいですわ」

「私は香辛料もあつたほうがいいと思います」

「わかった。じゃあ、デートがてらそれぞれの夫婦で行動しよう」

エアハルトさんがいきなりそんな提案をしてきたよ!?

しかも、アレクさんとナデイさんも、嬉しそうに頷いてるし！
ま、まあ、気持ちはわかるから私も頷く。

「いいですね。集合時間はどうしますか？」

「はっきりとは決めないで、一周したらここに戻ってくることにしようか」

「わかりました。ナデイ、行きましょうか」

「ええ！ どのような食材や調味料があるか、楽しみですわ！」

嬉しそうなアレクさんとナデイさんが微笑ましい。

「俺たちだけじゃなく、従魔たちのぶんも計算に入れろよ？」

「わかっております」

それでは、と左右に分かれて行動開始！

「それじゃあ、優衣。順番に見ていこう」

「はい」

プチデートだー！ と内心ではしゃぎつつ、道路の両脇にある食材や調味料を物色する。

絶対に必要な調味料は持ってきているけど、それほどたくさんは持ってきていない。道中でも買えるだろうと思ったからね。

ただし、味噌と醤油がドラールとアイデクセ以外にない困るので、大量に持っていることは内緒。

出発前に、ドラールに着いたら手作りの味噌と醤油、お豆腐を買うつもりだとヨシキさんに話したら、紹介状を書いてくれた。

ドラールにはヨシキさんの仲間が残っていて、『アーミーズ職人支部』として活動しているんだとか。

……いろいろと突っ込んでみたい。

その紹介状を渡せば、味噌と醤油、お豆腐を融通してくれるかもしれないんだって。融通してくれたら嬉しいな！

そんな調味料事情はともかく。

炒め物やサラダに使う野菜。

そろそろ肌寒いから、シチューなどの鍋やスープに使うもの。

他にも湖で獲れた魚とカニとエビ、塩と砂糖を基本にした調味料とスパイスを買いたが、エアハルトさんと町を散策する。

シヤケに似た姿で一メートル以上ある赤身の魚に、サバっぽい見た目で五十センチ前後の青魚。

まんまアンコウという名前の白身の切り身は、日本にいたときにスーパーで見た量の五倍はある。

それだけで、元の魚もとても大きいんだろうと想像できた。

あとは、伊勢^{いせ}海老^{えび}の倍近いサイズの車エビとボタンエビサイズのパナメイエビ、ゼーバルシユではスパイダークラブと呼ばれているタカアシガニというか、タラバガニっぽいものをそれぞれ箱買いしてしまった。

特にスパイダークラブは見た目が真っ黒で脚が長いからなのか、誰も買っていないかったんだよね。

もちろん、茹でてカットされているものは買っていくんだけど、丸ごとの姿のものはだれも買わないという不思議。

解体が面倒なのかもしれないと思った瞬間だった。

とはいえ、はしゃぐ従魔たちと眷属たちとは違い、隣にいるエアハルトさんは若干呆れている雰囲気醸し出しているわけ。

「優衣、買いきじやないか？」

「そうでもないですよ？ エアハルトさんたちはともかく、私の従魔たちと眷属たちは御覧の通りだし……」

「まあな……」

呆れた声音で言われたけど、うちは大所帯なうえに大型の子が多い。

というか、ラズとスマレ以外はほぼ大型だ。

食材によつては箱買いしても、一食でなくなってしまうこともあるんだよねえ。みんな凄くよく食べるから。

だからこそ、私たちしか踏破していないダンジョンの階層に行くと、根こそぎ殲滅して帰ってくるのだ。他の人たちのために残す必要がないから。

ダンジョンによりけりだけど、ボス部屋以外の魔物の復活時間も、最長で二時間も待っていれば復活^{リボツプ}するから、その間にゆっくり採取することもできたりする。

それもこれも、従魔たちと眷属たちがいるからこそだし、主人である私としては、みんなに好きなものをたくさん食べてほしいとも思ってる。

だから、今回もたくさん食材を買うのです！

そんな話をしたら、エアハルトさんには妙に納得してしまった。

エアハルトさんの従魔たちの成長具合はどうかなどの話をしつつ、あちこちのお店も箱買いしていたら、いつの間にか一周していた。

すぐアレクさんとナディさんとも合流したので、みんなで歩き始める。

途中にあつた屋台でワイバーンのお肉の串焼きが売っていたのでそれを朝食代わりに買い、食べ歩き。

ワイバーンのお肉は珍しいものじゃないけど、こうやって異国の地で食べ歩くといつてもより美味しく感じるから不思議だ。

そして、この町にもスリはいるみたいだけど、温泉の町フルドのように、組織的に動いている様子はなないみたい。

それでも現行犯で騎士^{きし}に引き渡されているところを見たから、まったくいないってわけじゃないんだろう。

こういう人ってどこにでもいるみたいだしね……盗賊と同じように。
私たちはスリにあうこともなく、買い物を終えた。

そのまま町を出るのかと思ったら、一度冒険者ギルドに寄るんだって。

なにをするのかと思ってエアハルトさんに聞いたら、ワイバーンの串焼きが売られているのを見て、ワイバーンの納品の依頼があるかもしれないと考えたんだって。

もし依頼があるなら、来るまでに狩ったワイバーンを納品することにしたみたい。

移動中に五体くらい連続で襲われたもんね……

ワイバーンは解体が大変だって言っていたから、そのままギルドに納品するほうが

楽っていうのもあるんだろう。

町の人に聞きながらギルドまで行く。

中に入ると冒険者たちに一斉に見られたけど、従魔たちがいることに気づいてからは、サツと視線を逸らしていた。

「ああ、こちらにございますね」

「お、数もちょうどあるな」

「こちらにはレッサードラゴンとサンダーバードもありますわ」

「全部納品しちゃいますか？」

「そうだな、そのほうがいいだろう」

冒険者たちの視線をまったく気にすることなく、Sランクの掲示板を見るエアハルトさんたち。

周囲はその掲示板の前にいる私たちに驚いて、騒めいている。

なにに驚いているのか不思議だったんだけど……

そろそろ八時になるというのにこんなにくさん依頼が残っているってことは、Sランクの冒険者がいないか、いたとしても狩る手段や術がないんだろうと、エアハルトさんたちが小さな声で話している。

数種類の依頼票を剥がしたエアハルトさんが、代表でカウンターに持っていく。なにかを話したエアハルトさんに対して、受付のお兄さんが驚いた顔をしてすぐに立ち上がると、カウンターから出てきた。

「こちらになります」

「ありがとうございます。移動するぞ」

エアハルトさんに促され、お兄さんのあとをついていく。

連れていかれた先は、見た目は比較的大きな小屋だったが、馬車と同じように拡張されているのか、中に入ったら体育館並みに広がった。

そのことにあんぐりと口を開けつつあとをついていく。

すると、受付のお兄さんが声を張り上げた。

「おい、ラウ爺^{じい}！ 大型の解体依頼だ！ 頼む！」

「おう！」

受付のお兄さんの呼びかけにラウ爺^{じい}と呼ばれた人が返事を返した。

奥のほうにいた集団の中から男性が一人歩いてくる。

筋骨隆々で、ところどころ白髪が交じっている男性だ。ゴールドさんのように髭^{ひげ}が長いから、ドワーフ族なのかも。

爺^{じい}と呼ばれるものの、どう見てもおじいさんには見えない。どちらかといえばおじさんの部類に入と思う。

そんなことを考えていると、私たちの元にその人が到着した。受付のお兄さんに紹介されたあと、改めてお互いに挨拶。

「ラウレントという。解体を専門にしている」

「『フライハイト』のリーダー、エアハルトだ」

二人はガッチリと握手していた。

そして、受付のお兄さんから渡された依頼票を見て、目を丸くして驚くラウレントさん。

納品するものをここに出してほしいとテーブルを指定されたので、マジックバッグから種類を分けて取り出す。

それはエアハルトさんたちも同じで、それぞれ種類ごとに分けて出している。

その数の多さはもちろんのこと、あまり傷がない状態だったからなのか、ラウレントさんに啞然とされた。

だけど、すぐに我に返って奥にいた人たちを呼ぶラウレントさん。

その声を聞いて、人々がたくさん集まってきた。